



水原華城の踏査から



西南暗門から見たところ



西南暗門を城内側から見る

華城の城壁には城壁に張出して設置されている雉城(チン)や砲楼(ポル)などの施設が多く見られます。これらは火砲や弓の射程距離を考慮した間隔で設置されているそうです(城壁は直線にすると崩れやすいので、蛇のように曲線で築くのが良いそうです。となると、雉や砲楼が設けられるのは城壁の強度のためにも必要だったのかもしれませんが)。楼に付属する木造建物は、城壁の天端の際までいっぱい築かれることはなく、天端には女墻を作りその内側に建てられていますし、そうした施設の城壁は煉瓦積みになっています。煉瓦だと大砲の砲弾が命中しても衝撃を吸収するので、石のように破裂しないため被害が小さくて済むのだそうです。

さて、華城には八達門(下右写真)のような甕城(下左右写真)を伴う大きな城門のほかに、暗門(アム)と呼ばれる、日本でいう埋門があります(姫路城のノ門の通路を想像してください)。暗門は石の基壇の上に煉瓦を積んで築かれています(ちなみに砲楼が乗る城壁は基部が基壇補築のようになっています)。門はアーチ状で、その上部に五星池(オリチ)という設備を備えています。これは非常防火設備とのことですが、韓国の古い建築には疎いため「本当ですか?」という印象を受けました。

華城の暗門で唯一木造建造物が付属するのが西南暗門(リナム)です。上右写真のように、櫓門のようになっています。西南暗門が他の暗門と異なるのは木造建築物が上に乗るだけではなく、門を出てもすぐに城外に出られないという点です。北と東の暗門はすぐに城外に出られます。西南暗門はこれを潜ると甬道(ソンド)が南に向かって伸びています(前頁左図の○。ニュース40号の空撮写真の□部分)。この道は女墻に挟まれた広めの武者走りみたいな平坦面です。途中2箇所雉城があり、先端には「華陽楼」と呼ばれる角楼があります。

この場所は八達山の南に延びる尾根線です。朝鮮半島の山城では、尾根の処理が日本と異なるように思われます。日本では曲輪を築いたり、堀切を設けるなどの処理が行われます。それに対してこの土地では、城壁を尾根の先まで延ばして城内に取り入れず中途半端に残していたりします。理由はわかりませんが、これでは敵が取りついた場合、守城側にとって不利な状況を引きかねません。華城では城内に取り込まなかった尾根上に設けたのがこの甬道なのです。「華陽楼」なんて趣のある名の建物からは想像できない機能も期待されていて、そのためこの暗門だけは門口上部に櫓的な木造建築物が載せられたのでしょう(普段は施錠されて入れないようになっているそうですが、どうみても人が頻繁に入っている形跡がありました)。



八達門(右)と華西門(左)。円形の張出が甕城。

華城には八達門と八達山に案内所があり、日本語ガイドがいます。また、行宮にも案内所があり、ボランティアガイドが建築や歴史について説明をしてもらうことができます。

大統領はお城好き？

所謂まちづくりの観点から華城について述べてきました。外見的には姫路の方が進んでいるようですが、行政に関わる人たちの情熱となるとこちらに分が悪いかもしれません。ただ、水原市が当初から情熱的に華城の保存・整備を進めてきたわけではなさそうです。もともとこの城の保存は、朴正熙(パクチョンヒ)の鶴の一声で始まったようで、軍人出身の権力者にとっては特に意味のある遺跡だったのでしょう。結果だけを見れば、華城の世界文化遺産登録はこの軍事政権があったためとも評価できます。文化財に関わる事柄というのは4、5年で「結果」が出せるようなものではないことを改めて実感します。

さて、朴氏が華城に関心が強かったのは、世界文化遺産の指定理由にもなっている「西洋と東洋の科学的粋」を集めて築かれた「韓国を代表する軍事的構造物」であるためと想像することは許されるでしょう。なぜなら、そうしたセンテンスは当時の朴政権が目指していた国づくりとオーバーラップするからです。

そんな“国家的思い入れ”を排除しても、華城には興味深いものがいくつもありました。それらを紹介します。

上左図は『華城城役儀軌』にある当時の華城の様子です。東から西を眺めた図で、中央の山頂が西将台です。前号で紹介した天主教の建物は、図の下に見られる丘陵上にあります。

華城の城壁は夾築で、外側は石で積まれています。姫路城の中・外曲輪のように土塁ということはありません。姫路城の場合、そのような土塁でも門の枳形は堅固な石垣になります。華城でも門付近の城壁はしっかりと築かれています。復元箇所が多いので現状から即断するのは危険ですが、切石を使い丁寧に積まれています。それに対して、上右写真の箇所(左写真の□の範囲；東側の城壁)では、加工度の小さな石を乱積に近い状態で積んでいて(ガイドの話によると、石はまず矢穴をあけ、そこに栗の木を差し込み、木に水をしみ込ませる。すると木が膨張して石が割れるそうです)、門付近やほかの城壁とは別の顔になっています。この積み方の違いが、華城研究会では謎だったそうです。日本では近世城郭の視角効果について議論されるようになってきました。この成果を参考にすれば、華城の東側は当時、水田地帯だったことが左図からわかるので、人目にさらされない(目立たない)場所では丁寧な造作が行われなかったためかもしれません。



"Shiro Fumi" No.42 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.